

旭川医科大学
外部評価報告書
「教育・研究・社会貢献活動」

平成15年6月

はじめに

平成14年度旭川医科大学外部評価は、本学が先に実施した自己点検・評価の結果について、学外有識者で組織する外部評価委員会において検証・評価し、その結果をフィードバックすることにより本学の教育研究活動等の改善に役立てることを目的とし、平成14年12月から平成15年3月にかけて書面調査及び実地調査により実施されました。このたび、その結果が外部評価報告書として取りまとめられ刊行する運びとなりました。

外部評価の実施にあたり、委員就任を快くお引き受けくださいました廣重先生はじめ諸先生には、寒さ厳しい折り、御多用中にも拘らず遠路旭川までお越しくくださり、また、本学にとっては初めての試みということで行き届かない点多々あったかと思われませんが、懇切丁寧な外部評価の下に報告書を作成していただきました。ここに、賜りました多大の御貢献に対して厚く御礼申し上げます。

私共はこの御厚意に報いる為にも、頂戴した貴重な御提言・御批評を真摯に受け止めると共に十分に理解し、本学の教育研究活動等の改善に結びつけていくことが何より大切であると決意するものがあります。

最後に、外部評価の実施と報告書の刊行に御尽力いただいた点検評価委員会及び関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

旭川医科大学長

久保良彦

目 次

はじめに

外部評価実施の概要

平成 14 年度 旭川医科大学外部評価実施要領	1
旭川医科大学外部評価委員会	3
旭川医科大学点検評価委員会	5
外部評価プロセス	7
外部評価資料一覧	8
外部評価委員会（実地調査）日程等	10
学内視察	11
外部評価実施までの経緯	12

外部評価報告

廣 重 力 委員長	13
神 津 忠 彦 委員	17
佐 藤 達 夫 委員	27
秋 野 豊 明 委員	29
井 上 芳 郎 委員	33
加 藤 紘 之 委員	37
新 津 洋 司 郎 委員	43
正 木 治 恵 委員	47
松 木 光 子 委員	50

外部評価実施の概要

平成 14 年度 旭川医科大学外部評価実施要領

平成 14 年 9 月 10 日
点検評価委員会決定

(目 的)

第 1 大学設置基準第 2 条第 3 項に基づき、本学の教育研究水準の向上に資するため、教育研究活動等の状況に関して自ら行った点検及び評価の結果について、学外有識者で組織する外部評価委員会において検証・評価し、その結果をフィードバックすることにより、本学の教育研究活動等の改善に役立てるものとする。

(評価事項)

第 2 評価事項は次のとおりとする。

- ① 教育活動に関すること。
- ② 研究活動に関すること。
- ③ 社会貢献活動に関すること。

(組織及び役割)

第 3 外部評価を実施するための組織及び役割は次のとおりとする。

(1) 点検評価委員会

- ① 外部評価実施要領の作成
- ② 外部評価委員の選考
- ③ 外部評価計画及び評価プロセスの作成
- ④ 自己評価資料の収集、整理及び作成
- ⑤ 外部評価結果の取りまとめ及び公表
- ⑥ その他外部評価の実施に関する事項

(2) 外部評価委員会

- ① 自己評価資料の書面調査に基づく評価
- ② 実地調査（ヒアリング及び施設等視察）に基づく評価
- ③ 上記①及び②の結果報告

(外部評価委員の委嘱)

第 4 外部評価委員は点検評価委員会において上記第 2 の評価事項ごとに選考し、学長が委嘱する。

(実施方法)

第5 外部評価委員会は、本学が実施した自己点検・評価及び大学評価・学位授与機構による全学テーマ別評価の自己評価の結果について、次の方法により検証し、評価する。

- ① 点検評価報告書、自己評価書及びその根拠資料に関する書面調査
- ② 点検評価委員及び関係教職員等からのヒアリング
- ③ 教育研究施設等の実地視察

(評価報告書の作成及び公表)

第6 外部評価委員から提出された評価結果は、点検評価委員会において「外部評価結果報告書」として取りまとめ、学内外に公表する。

旭川医科大学外部評価委員会

1 外部評価委員

委員長 廣 重 力 北海道医療大学長
(元北海道大学総長・前大学入試センター所長)

委員 秋 野 豊 明 札幌医科大学長

// 井 上 芳 郎 北海道大学副学長

// 加 藤 紘 之 北海道大学医学部附属病院長

// 神 津 忠 彦 東京女子医科大学医学部教授

// 佐 藤 達 夫 東京医科歯科大学医歯学教育システムセンター長

// 新 津 洋司郎 札幌医科大学医学部教授

// 正 木 治 恵 千葉大学看護学部教授

// 松 木 光 子 日本赤十字北海道看護大学長

(委員長以外の委員は五十音順に掲載)

2 外部評価委員評価分担

- 総括
委員長 廣重力
- 教育活動（医学教育・教養教育・社会貢献）
委員 神津忠彦
委員 佐藤達夫
- 研究活動（基礎医学・一般教育・社会貢献）
委員 秋野豊明
委員 井上芳郎
- 研究活動（臨床医学・社会貢献）
委員 加藤紘之
委員 新津洋司郎
- 教育活動及び研究活動（看護学・社会貢献）
委員 正木治恵
委員 松木光子

（評価分担ごとの委員は五十音順に掲載）

旭川医科大学点検評価委員会

1 点検評価委員

委員長	久保良彦	(学長)
委員	片桐一	(副学長)
〃	牧野勲	(副学長)
〃	山内一也	(図書館長)
〃	塩野寛	(動物実験施設長)
〃	小川勝洋	(実験実習機器センター長)
〃	飯塚一	(放射性同位元素研究施設長)
〃	高後裕	(保健管理センター長)
〃	吉田成孝	(解剖学第一 教授)
〃	坂本尚志	(生理学第二 教授)
〃	鈴木裕	(生化学第二 教授)
〃	若宮伸隆	(微生物学 教授)
〃	立野正敏	(病理学第二 教授)
〃	高井章	(生理学第一 教授)
〃	菊池健次郎	(内科学第一 教授)
〃	千葉茂	(精神医学 教授)
〃	八竹直	(泌尿器科学 教授)
〃	吉田晃敏	(眼科学 教授)
〃	岩元純	(看護学科 教授)
〃	木村昭治	(看護学科 教授)
〃	良村貞子	(看護学科 教授)
〃	上口勇次郎	(一般教育 教授)
〃	高橋雅治	(一般教育 教授)
〃	近藤均	(一般教育 教授)
〃	太田貢	(事務局長)

2 「外部評価」実施検討ワーキンググループ

座長 片桐 一
委員 小川 勝洋
" 吉田 成孝
" 坂本 尚志
" 木村 昭治
" 上口 勇次郎

3 外部評価事項別対応グループ

○ 総括

委員長 久保 良彦
委員 片桐 一
" 牧野 勲
" 太田 貢

○ 研究活動

責任者 飯塚 一
委員 吉田 成孝
" 鈴木 裕
" 若宮 伸隆
" 立野 正敏
" 菊池 健次郎

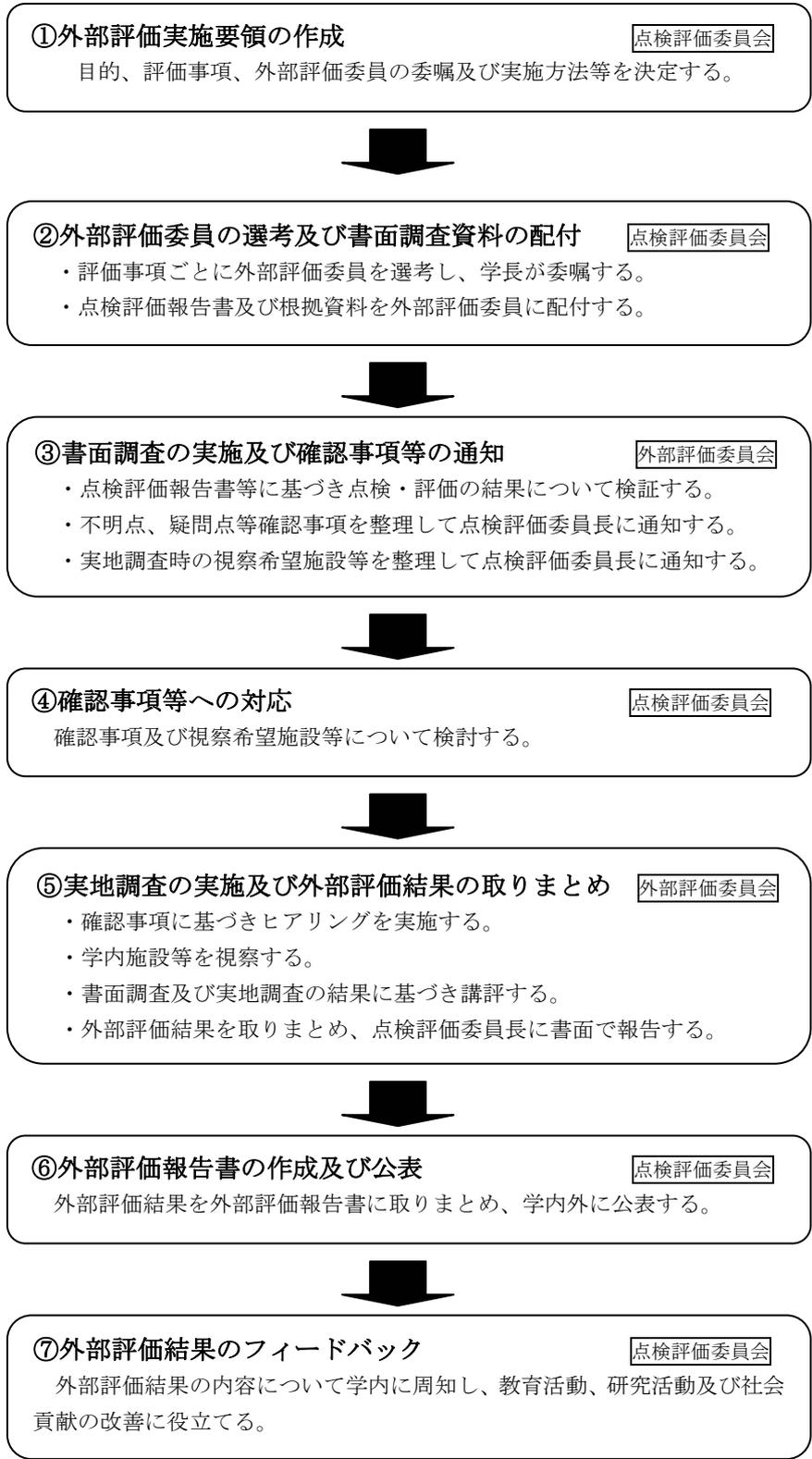
○ 教育活動

責任者 坂本 尚志
委員 塩野 寛
" 高後 裕
" 高井 章
" 千葉 茂
" 岩元 純
" 良村 貞子
" 上口 勇次郎
" 近藤 均

○ 社会貢献活動

責任者 小川 勝洋
委員 八竹 直
" 吉田 晃敏
" 木村 清二
" 高橋 雅治

外部評価プロセス



外部評価資料一覧

[共通]

- 1 旭川医科大学点検評価報告書／旭川医科大学年報第7号
- 2 旭川医科大学概要
- 3 運営諮問会議答申
- 4 施設紹介パンフレット ー遠隔医療センターー
- 5 施設紹介パンフレット ースキルズ・ラボラトリーー
- 6 学術広報誌 ー旭川医科大学研究フォーラム
- 7 旭川医科大学規程集

[研究活動]

- 1 国立大学における教養教育の取組の現状 ー実情調査報告書 (抜粋) ー
- 2 自己評価書「教養教育」
- 3 学生生活のしおり ー平成10年度版(旧カリキュラム)抜粋ー
- 4 学生生活のしおり ー平成13年度版(新カリキュラム) ー
- 5 学生による授業評価結果(広報誌「かぐらおか」109号)
- 6 医学科履修要項 第1学年
- 7 看護学科履修要項 第4学年
- 8 授業時間割(医学科・看護学科)
- 9 臨床実習カリキュラム
- 10 臨地看護学実習ガイドライン
- 11 臨地看護学実習実践編
- 12 学生募集要項等
 - ① 入学者選抜要項
 - ② 一般選抜
 - ③ 医学科第2次後期編入学
 - ④ 医学部看護学科第3年次編入学
 - ⑤ 大学院医学系研究科修士課程[看護学専攻]
 - ⑥ 大学院医学系研究科(博士課程)

- ⑦ 大学院医学系研究科(博士課程)外国人留学生
- ⑧ 大学案内
- ⑨ 私費外国人留学生
- ⑩ A O入試
- ⑪ 推薦入学
- ⑫ 帰国子女

[研究活動]

- 1 研究活動判定票分野別集計
- 2 研究対象別業績リスト
- 3 個人別研究活動判定票
- 4 講座別研究活動判定票

[社会貢献活動]

- 1 自己評価書「教育サービス面における社会貢献」
- 2 自己評価書「研究活動面における社会との連携及び協力」
- 3 旭川医科大学派遣講座のご案内

外部評価委員会（実地調査）日程等

- 1 日 時 平成15年2月21日(金) 9:00～16:30
2 会 場 旭川医科大学第一会議室
3 次 第

9:30～

- 外部評価委員の紹介
- 点検評価委員会委員の紹介
- 学長挨拶
- 当日の日程案内及び配付資料の確認等
- 外部評価委員会の議長選出

10:00～

- 議長挨拶
- 実地調査の進め方及び外部評価報告書の取りまとめ方等審議
- 点検評価報告書等の概要説明 [片桐副学長及びWGの座長等]

10:30～

- 実地調査 [評価事項ごとの対応グループで対応]
 - ・確認事項及び追加資料の説明
 - ・ヒアリング
 - ・学内視察

12:00～

- 昼 食

13:00～

- 実地調査 [評価事項ごとの対応グループで対応]
 - ・確認事項及び追加資料の説明
 - ・ヒアリング
 - ・学内視察

15:45～

- 外部評価委員の打合せ (別室)
- 外部評価委員会による評価結果(概要)の講評
- 学長から謝辞

16:30 終 了

学 内 視 察

- 1 遠隔医療センター (60分)
外部評価委員 : 全 員
学内担当委員 : 片桐 一 牧野 勲 吉田晃敏

- 2 スキルズ・ラボラトリー (30分)
外部評価委員 : 全 員
学内担当委員 : 高後 裕

- 3 附属病院新東病棟 7階及び9階 (20分)
外部評価委員 : 全 員
学内担当委員 : 牧野 勲

- 4 附属図書館 (20分)
外部評価委員 : 佐藤達夫
学内担当委員 : 山内一也

- 5 解剖実習室 (20分)
外部評価委員 : 佐藤達夫
学内担当委員 : 吉田成孝

- 6 看護実習室 (20分)
外部評価委員 : 正木治恵 松木光子
学内担当委員 : 良村貞子

- 7 テュートリアル室 (30分)
外部評価委員 : 神津忠彦
学内担当委員 : 坂本尚志

外部評価実施までの経緯

- 平成 14 年 2 月 6 日 旭川医科大学点検評価委員会において同委員会の下に「外部評価」実施検討WGを設置
- 8 月 30 日 「外部評価」実施検討WG（第 1 回）で平成 14 年度旭川医科大学外部評価実施要領案の作成
- 9 月 10 日 旭川医科大学点検評価委員会で平成 14 年度旭川医科大学外部評価実施要領を決定
- 9 月 25 日 教授会において平成 14 年度旭川医科大学外部評価実施要領を報告
- 11 月 5 日 旭川医科大学外部評価委員候補者に同委員就任を依頼
- 11 月 11 日 旭川医科大学点検評価委員会で旭川医科大学外部評価委員を決定
- 11 月 27 日 教授会において旭川医科大学外部評価委員会の設置を報告
- 12 月 2 日 旭川医科大学外部評価委員の委嘱発令
- 12 月 18 日 「外部評価」実施検討WG（第 2 回）で外部評価実施計画案の作成
- 12 月 24 日 旭川医科大学点検評価委員会で外部評価実施計画の決定
- 12 月 26 日 旭川医科大学外部評価委員に書面調査の実施を依頼（評価資料送付）、及び実地調査の日程等を通知
- 平成 15 年 1 月 8 日 教授会において平成 14 年度旭川医科大学外部評価の実施計画を報告
- 2 月 3 日 旭川医科大学点検評価委員会で旭川医科大学外部評価委員会及び実地調査の次第等を確認
- 2 月 21 日 旭川医科大学外部評価委員会の開催及び実地調査の実施

外部評価報告

総 括

1 教育活動

(1) 医学部医学科における教育活動 [担当委員：神津忠彦・佐藤達夫]

医学部医学科における教育活動について、次の7つの観点を採用された。

①教育目標、②学生の受入れ、③教育の内容面での取組、④教育方法及び成績評価面での取組、⑤教育の達成状況、⑥学生に対する支援、⑦教育の質の向上及び改善のためのシステム

各観点に対応して細かい指摘がなされたが、その内容については、担当委員の個別の報告を待つこととして、以下に全体をとおした講評を述べる。

久保学長を中心とする大学執行部が、大学運営の基本方針として教育活動の充実を優先させたことが効を奏し、旭川医科大学では医学教育改善に向け誠実な努力が傾倒され、その改善内容には見るべきものがある。しかし、同時にさらなる充実を目指した工夫も求められている。例えば、観点④の教育方法の改善として導入された「スキルズ・ラボラトリー」での臨場感あふれる実習は、多大な教育効果が期待され実に印象的であったが、これらの施設がフルに活用され、旭川医科大学の卒業生が「臨床実習」において他を凌駕する実績を挙げるためには、実習ソフトを含めた指導マニュアルの確立が必要であると思われた。

観点①から⑦の共通の指摘として、学生の立場から見た到達目標の明示が必ずしも行われていない点であった。一部にはそのような試みも散見されていたが、全体をとおして、重みづけされ、順序づけされた到達目標を学生に対して明示することは必須と思われる。その際、到達目標を「知識」「技能」「態度」のカテゴリーに分けて明示することが適切であるという神津委員の指摘が印象に残った。

医学科全体を通じて教育活動は『優れている』という講評である。

(2) 医学部看護学科における教育活動 [担当委員：正木治恵・松木光子]

以下の7つの観点を採用された。

①教育目標、②学生の受入方針、③教育の内容面での取組、④教育方法及び成績評価面での取組、⑤教育の達成度、⑥学生に対する支援、⑦教育の質の向上及び改善のためのシステム

各論的な評価は、それぞれ担当委員の報告にまかせるが、全体としては学生の立場に立った学習の到達目標を明示するなど、意欲的な取組が見られる。しかし、カリキュラムで特に力点を置いている「地域看護」については、まだ十分にカリキュラムに系統的に反映されていない

と思われ、さらなる努力が求められる。しかし、創設7年目を迎えたばかりであるため、今後の努力に期待することとした。

(3) 大学院医学系研究科の現状と課題 [担当委員：神津忠彦・佐藤達夫]

以下の5つの観点から評価が行われた。

①概要、②教育理念、③教育目標、④学生の充足情報等、⑤大学院教育

充足率が修士課程で81%、博士課程で71%であり、かなりの評価がなされたが、さらに社会人枠を増加することが示唆された。また、外国人留学生が少なく、外国との学生交流の促進の必要性が指摘された。

(4) 教養教育 [担当委員：神津忠彦・佐藤達夫]

以下の4つの観点から評価が行われた。

①実施体制、②教育課程の編成、③教育方法、④教育への効果

全体の印象としては、上記の4つの観点について、その要素の分析を丹念に試みており、その真摯な努力に敬服した。しかし、観点ごとの評価レベルが全体の評価レベルと必ずしも整合性を示さないなど、評価作業の困難さを浮き彫りにしている。

2 研究活動

医学科における研究活動は、原則として「基礎医学と一般教育」、「臨床医学」、「看護学」の3つに大別して行われた。

(1) 基礎医学と一般教育 [担当委員：秋野豊明・井上芳郎]

(2) 臨床医学 [担当委員：加藤紘之・新津洋司郎]

(3) 看護学 [担当委員：正木治恵・松木光子]

以下の5つの観点が採用された。

① 研究目的及び目標

- 1 研究目的
- 2 医学科の研究目標
- 3 看護学科の研究目標
- 4 一般教育の研究目標

② 大学全体としての自己判定及び評価

- 1 個人別研究活動判定及び評価
- 2 講座等研究活動判定及び評価

③ 医学科における研究評価

- 1 研究評価
- 2 社会（社会・経済・文化）的貢献

④ 看護学科における研究評価

- 1 現状と評価
- 2 今後の課題

⑤ 研究支援体制

- 1 臨床研究の「場」としての医学部附属病院の機能と意義
- 2 共同利用施設の研究支援体制

教育活動の場合に準じ、個別の指摘はそれぞれの担当委員の報告に委ねることとし、ここでは全体を通じた講評を試みる。

基礎医学ならびに一般教育の研究活動については、地域特性を活かした研究が力強く進められるとともに先端的な研究も精力的に行われ、極めて優れていると思われる。

一方、これを支える大型の研究用機器の整備は、21世紀のポストゲノム時代を睥睨するには不安があるという指摘がなされた。また、用意された資料に一般教育関連の資料が欠如していたが、これは手違いと判明した。

臨床医学の研究活動については、全体として研究内容の臨床還元を意識したものが多く評価できる。あえて言えば、研究課題の分散が目につくが、単科医科大学として全学的視野に基づいた統合を試みてはどうか。同様に基礎医学と臨床医学のさらなる連携を進めるべきだとの意見もあった。臨床研究の症例数に説得力をもたせるために民間医療機関との連携も図るべきとの指摘もあった。

看護学科の研究活動については、目下教育内容の充実に専念しており、今後の課題とされた。

3 社会貢献活動 [担当委員：全員]

教育活動、研究活動、医療活動のいずれの局面においても、然るべき社会貢献活動が期待されている。そのため、このたびの外部評価委員会では、テーマごとに縦割りにして内容を分散させることを避けるために、最後に一括して論じることとした。学内施設の視察が計画され、全員が「遠隔医療センター」、「スキルズ・ラボラトリー」、建設中の「新病棟」を視察した。

これらを総合すると、旭川医科大学は「教育目標」に掲げている「地域医療への貢献」に全力を傾け、地域医療の守り手として成長してきたことが実感された。それは目下整備が進められている「救急システム」や膨大な「生涯学習プログラム」実施の実績にとどまることなく着実に発展を続け、今や地域医療のみならず、グローバルに活動の場を広げている「遠隔医療セ

ンター」の活躍ぶりに象徴されていると思われた。

4 まとめ

教育面では、医師の適性を求めてアドミッション・ポリシーを明示し、多様な入試方法を他に先駆けて導入し、チュートリアル教育を導入して学生の自学自習の環境整備に力を注いでいる。

研究面でも先端的研究のみならず、地域の特性に根ざした研究を着実に発展させていることは賞賛に値する。

医療面では、教育目標に基づき着実な努力が積み重ねられ、道北・道東エリアの医療レベルの向上に大きく貢献していることは高く評価できる。

今回の外部評価が幾ばくかの示唆となり、絶えざる研鑽を続けられるならば、今後の発展が大いに期待される。

評価事項：教育活動（医学教育・教養教育）

I 医学部医学科

1 教育目標

◇ 特色ある優れた点

- (1) 開学時に設定された教育理念を時代の変化に合わせて補足改善し、旭川医科大学が担う使命への新しい視点が盛り込まれている。
- (2) 教育目標が整理され、学生・教職員・入学志望者などへ明確に示されている。目標として挙げられた、
 - ① 論理的思考能力の開発
 - ② 医療倫理の育成
 - ③ 基本的臨床能力育成
 - ④ 課題探求・問題解決能力育成
 - ⑤ コミュニケーション能力育成
 - ⑥ 安全管理・チーム医療の実践能力育成
 - ⑦ 遠隔医療を含む地域医療への貢献
 - ⑧ 国際交流などはいずれも重要かつ妥当な目標である。

◇ 改善が期待される点

大学側から見た教育目標は明示されているが、学生から見た卒業時までの到達目標が示されていない。学生が自らの到達すべき内容を常に見つめることができるよう配慮されたい。

なお、到達目標を提示するにあたっては知識、技能、態度の3領域について、具体的行動目標として示すことが望ましい。

2 学生受入れ方針

◇ 特色ある優れた点

- (1) 選抜方針を明示している。方針として挙げられた、
 - ① 医師への適性
 - ② 地域社会への関心
 - ③ 課題探求と問題解決への意欲と行動力

などはいずれも妥当なものである。

(2) 受入れ方針の周知徹底を図っている。具体的には、

- ① 募集要項，選抜要項，大学案内へ明記
- ② 北海道全域の高等学校へ送付
- ③ 大学入試センターのホームページへの掲示
- ④ オープンキャンパスでの説明会と模擬授業
などが行われている。

(3) 入学者選抜方法を多様化し、さまざまな観点から入学者選考を行っている。具体的には、

- ① 一般選抜前期日程（20名）
- ② 一般選抜後期日程（55名）
- ③ AO入試（10名）
- ④ 推薦入学（10名）
- ⑤ 帰国子女特別選抜（若干名）
- ⑥ 私費外国人留学生選抜（若干名）
- ⑦ 学士対象第2学年後期編入学（5名）

などが行われているが、なかでも合宿によるAO入試はユニークな試みであり、高く評価される。

(4) 試験モジュールに工夫を凝らし、

- ① 学力：センター試験
- ② 論理的思考：数学，総合問題，小論文
- ③ 倫理観：小論文，個人面接，集団面接
- ④ 課題探求・問題解決：総合問題，小論文，個人面接，集団面接
- ⑤ コミュニケーション能力：英語，集団面接，個人面接
- ⑥ 地域医療への貢献：個人面接
- ⑦ 国際交流：英語，総合問題，小論文

など多様な方式を導入し、選抜方針を実現するための役割をそれぞれに付与している。

◇ 改善が期待される点

- (1) 推薦入学制度に学力試験を課している点は、文部科学省の基本的な指導方針と異なるものであり、今後も継続するか否かについて慎重な検討を行うことが望まれる。
- (2) 今後、上記の多様な入学者選抜方法の成果の分析結果について報告がなされることが望ましい。とりわけユニークなAO入試の意義と位置づけが明らかとされることが期待さ

れる。

- (3) 面接評価のための教育機能開発に一層の努力が望まれる。面接評価の評価者間格差を極力減らし、評価の公平性が保たれるよう評価基準の構造化に努力するとともに、面接者の評価能力育成のためのプログラムを充実されたい。

3 教育内容面での取組

[臨床前医学専門教育]

◇ 特色ある優れた点

- (1) 統合型学習を推進するために、新新カリキュラムでは「医学英語」を除きすべての科目が統合カリキュラム化され、学体系型の科目を廃止した。
- (2) 国際化を念頭に医学英語を4年間にわたって必修としている。

◇ 改善が期待される点

- (1) ほとんどの科目で到達目標が示されていない。わずかに「社会医学基礎Ⅰ」などに到達目標が明示されているのみである。今後、各科目に関する到達目標（知識、技能、態度）を明示することが望ましい。
- (2) 具体的な授業内容（シラバス）を示した週間時間割表がない。週間時間割表には授業科目名があり、各科目ごとの一覧表の中にはシラバスが示されているが、学生の立場から見ると教育の全体像が把握し難い。両者を組み合わせて週間時間割表の中にシラバスも示すことが望ましい。
- (3) モデル・コア・カリキュラムとの対応に努力を傾注している点は見られるが、さらに到達目標を最小限度の目標（コアとなる目標）と、発展的な到達目標に分けて提示することを提言したい。

[臨床実習]

◇ 特色ある優れた点

- (1) 「臨床実習カリキュラム」が整備されている点は特筆される。具体的には、以下のとおり。
 - ① 診療科ごとに実習の時間割表があり、1日のスケジュールがシラバスとして明記されている。
 - ② 診療科ごとに到達目標と到達度チェックリストが整備されている。
 - ③ 患者に対するインフォームドコンセントの取得に関する指針が整備されている。
 - ④ 臨床実習における事故発生への対応マップが整備されている。
 - ⑤ 医学生を対象とする総合補償制度が整備されている。

- (2) 診療参加型臨床実習（クリニカルクラークシップ）を現行体制の中で可能な限り実現しようと努力している。
- (3) 臨床指導教授・助教授・講師制度を取り入れ、平成13年度には26名の外部からの教育担当者を採用した。
- (4) 学外関連教育病院として、①市立旭川病院、②旭川赤十字病院、③国立療養所道北病院と臨床実習に関するきめ細かい「取り決め」を交わし、地域医療への視点を涵養するための内容の充実した臨床実習の機会を提供している。

◇ 改善が期待される点

- (1) 診療参加型臨床実習を一層充実させるため、病棟チームに一層の教育機能を備えるよう努力されたい。
- (2) 学生に許容する医行為水準を、旭川医科大学として全診療科に共通な形で明示する必要がある。

4 教育方法及び成績評価面での取組

◇ 特色ある優れた点

- (1) テュートリアル教育を導入し課題探求・問題解決能力育成を図っている。すなわち「テュートリアルⅠ」では自習能力・討論能力・生物医学～社会医学的な統合学習を、「テュートリアルⅡ」で応用展開能力・臨床的な統合学習を狙いとしている。
- (2) テュートリアル室を16室整備し、学生の自学自習環境を改善している。
- (3) 早期体験実習、社会医学基礎、等を導入し、医療者への動機づけ教育を行っている。
- (4) 臨床実習開始前の評価システムの整備が図られている。
- (5) 共用試験導入プロジェクトに参加し、平成17年度からの本格運用参加を予定している。
- (6) 臨床技能教育の充実を図ろうとしている。
 - ① 医学教育実践指導センターが設置されている。
 - ② スキルズ・ラボラトリーが整備されている。
 - ③ 医学生のみならず研修医や医師の生涯学習にも利用されている。
- (7) 基本的臨床技能教育の評価にOSCEが導入されている。
 - ① 共用試験としてのOSCEを行っている。
 - ② 臨床実習到達度評価としてのOSCE、あるいは卒業試験としてのOSCEの導入を積極的に検討している。
 - ③ 本学の特色である遠隔医療のための準備教育を整備している。
 - ④ 「医学研究特論」で研究手法を学ぶ機会を提供している。

- ⑤ 成績評価の基準化に努力している。
 - i) 成績評価の方法と基準を履修要項に明示している。
 - ii) 共用試験を導入することが決定されている。

◇ 改善が期待される点

- (1) 「医学科履修要項」をさらに分かりやすいものへ改善することが望まれる（前述）。
- (2) 教員のチュートリアル課題作成能力開発や、チュータのファシリテーション能力育成のためのシステムをさらに充足させることが望ましい。
- (3) チュートリアル学習と他の一斉講義・実習との連携をさらに強めることが望まれる。
- (4) 医師となるための態度教育・面接技法教育を単発的ではなく、少なくとも4年間にわたり体系的かつ構造化された実習として設定してはどうか。
 - ① 面接技法の体系的実習プログラムを充実させる。
 - ② コメディカルとのチーム医療のための教育、とりわけ看護実習を充実させる。
 - ③ 施設見学の体系化（老健施設、障害者施設、介護施設など）を行う。
 - ④ 救急車同乗実習、診療所実習を導入する。
- (5) スキルズ・ラボラトリーに優れた設備があるにも拘らず、実技教育の体制が十分整っていないように見受けられた。模型を使う実技教育では一定の手順に沿った教育プログラムを考案し、教員も学生もそのプロセスを追いながら効果的に実習をすることが必要であろう。

5 教育の達成状況

◇ 特色ある優れた点

- (1) 国家試験合格率は概ね96%程度で、ほぼ満足できる結果を示している。
- (2) 卒業生の追跡調査の導入を検討中である。

◇ 改善が期待される点

- (1) 卒業時の到達目標が明示されていないため、教育の達成状況を判定するための指標が明確でない。
- (2) 卒業後に旭川医科大学に大学院・研修医として残る者の割合が比較的少ない。この理由としては地域的条件など構造的な要素が大きいと考えられるが、大学院教育・臨床研修プログラムをさらに魅力あるものにするよう努力されたい。

6 学生に対する支援

◇ 特色ある優れた点

- (1) 学生の学習支援に有用な「学生生活のしおり」が整備されている。

- ① 学生に詳細な学則を明示している。
 - ② セクシャルハラスメントの防止に力を入れている。
 - ③ 運転者への交通事故・違反防止と国家資格への影響などに触れた記載があり、学生の将来に対する暖かい細やかな配慮が感じられる。
- (2) 学生による教員・授業評価を行い、学生のニーズに応えようとしている。
 - (3) 附属図書館を 24 時間利用可能としている。
 - (4) 学習支援体制のハード面が整備されている。
 - ① 学生用コンピュータ機器が整備（講義室、実習室、情報処理室）されている。
 - ② メディア教材が整備（コンピュータソフト・ビデオ・模型・標本）されている。
 - ③ スキルズ・ラボラトリーが整備されている。
 - (5) 保健管理センターを設け、学生の健康診断を毎年実施し、教育研究災害傷害保険への加入を勧奨している。
 - (6) 学納金に関する免除制度、猶予制度があり、学内奨学制度も設けている。
 - (7) 学年担当制度を設け、学生相談コーナー、セクハラ相談員などを配置している。

◇ 改善が期待される点

学生のニーズを汲み上げるための継続的なシステムをさらに充実させることが望ましい。

- ① 教育内容に関する学生の希望を吸収するためのカリキュラム懇談会を設置する。
- ② 福利厚生に関する学生の要望を吸収するための厚生懇談会を設置する。

7 教育の質の向上及び改善のためのシステム

◇ 特色ある優れた点

- (1) 平成 10 年度に視学委員による視察を受けた。
- (2) 平成 10 年度から「教育改革ワークショップ」を定期的で開催している（7 回）。
- (3) テュータ養成プログラムを定期的で開催し、延べ 226 名が参加した。
- (4) 教育課程編成小委員会を設けてカリキュラム改革に着手した。
- (5) 平成 11 年度入学者から新カリキュラムを導入した。
- (6) 教務委員会を平成 13 年度から教務・厚生委員会とし、以下の下部組織を整備した。
 - ① 早期体験実習委員会
 - ② テュートリアル教育実施委員会
 - ③ 臨床実習委員会
 - ④ その他
- (7) 平成 13 年度に「医学教育実践指導センター」を設け以下の部門を設置した。

① 教育内容・方法調査研究部門

② 教育機能開発部門

③ 生涯教育部門

(8) 旭川医科大学運営諮問会議に諮り、平成13年に「21世紀に向けて旭川医科大学の進むべき方向について」(中間まとめ)、平成14年に同(答申)を受けた。

(9) 平成14年に点検評価報告書を公表した。

(10) 入学者選抜方法研究委員会を編成して、選抜方法のさらなる改善を目指している。

(11) アドミッションオフィス設置へ向けて具体的な運び(概算要求)が進んでいる。

◇ 改善が期待される点

(1) 教員の教育能力開発(ファカルティ・ディベロップメント)のための計画的かつ継続的なプログラムを整備されたい。

(2) 教員の教育業績評価システムをさらに整備することが望まれる。

(3) 教員選考プロセスの中へ、教育能力評価が実効性をもって導入されることが望まれる。

II 大学院医学系研究科

1 概要

◇ 特色ある優れた点

(1) 社会人特別選抜を導入し、昼夜開講体制が行われている。

(2) 外国人留学生のための特別枠が提供されている。

(3) 3年修了制度が導入された。

2 教育理念

◇ 特色ある優れた点

(1) 大学院の教育理念が明記されている。

(2) 国際的視野を涵養するために英語の基礎学力を重視している。

3 教育目標

◇ 特色ある優れた点

学生募集要項に「別表」で教育内容の概要(授業科目)が明示されている。

◇ 改善が期待される点

(1) 具体的な教育内容を示した「教育要項」を整備することが望ましい。

① 研究者としての共通基盤を作るための必修基礎(総合)カリキュラムを設定することが望ましい。

② 分野別の各科目のシラバスを明示することが望ましい。

③ 教育研究の指導者となるための教育・指導能力の開発教育も導入すると良い。

(2) 大学院卒業までの到達目標が設定されていない。

① 専門領域と共通基礎領域

② 研究者として

③ 教育指導者として

それぞれの領域における学識、技術、能力、態度の到達目標を明示したい。

(3) 旭川医科大学として特に重点化する、特色ある教育内容があっても良いのではないか。

4 学生の充足状況等

◇ 改善が期待される点

(1) 昭和 13 年度博士課程は充足率 60.0%で、なお努力が必要とされる。

(2) 専攻・分野別の学生定員充足状況が見あたらない。明示すべきであろう。

5 大学院教育の現状と課題

◇ 特色ある優れた点

卒後臨床研修必修化（平成 16 年度）との整合性を図るために、大学院入学を卒後 3 年目からと定めている。

◇ 改善が期待される点

(1) 大学院教育のための教育スタッフの態勢が十分ではない。

(2) 大学院学生のための共同研究施設のさらなる整備が必要であろう。

III 教養教育

1 実施体制

◇ 特色ある優れた点

(1) 「教育課程編成委員会」により「新・新カリキュラム」が平成 14 年度から実施された。

(2) 平成 11 年度から「学生による授業評価部会」が設けられ、平成 11 年度に第 1 回の授業評価が行われた。

(3) 平成 10 年度に教養教育関連の教員 31 名が参加して「カリキュラム改革に関する宿泊研修」が行われた。

(4) 文部省（当時）の F D 推進経費の支援を受け、チュータ養成ワークショップを毎年度実施している。

(5) 単科医科大学としての不利を単位互換制度により補う努力をしている。

2 教育課程の編成

◇ 特色ある優れた点

- (1) 入学者の学力に応じたリメディアル教育を提供している。
- (2) 個々の学生のニーズに応じて個別的対応のできる指導体制を整えている。
- (3) 教養教育と専門教育との有機的な連携を図っている。
- (4) 教養教育に医療人への人間育成という視点を強く内在させている。

具体的には、①社会福祉論、②医療人間学、③環境科学、④情報リテラシーなど。

- (5) 履修時期を伸ばし第4学年まで選択可能としている。

3 教育方法

◇ 特色ある優れた点

- (1) 一斉講義の内容を工夫し、情報科学、情報リテラシー、比較文化論、コミュニケーション論、環境科学などの新しい科目を導入した。
- (2) 少人数グループによるチュートリアル教育を行い、自発的課題探求・問題解決・論理的思考などの能力開発教育を行っている。

4 教育の効果

◇ 特色ある優れた点

教育評価（成績判定）について、その評価基準を履修要項に明記している。

◇ 改善が期待される点

- (1) 教養教育の授業計画について専門教育の担当責任者と協議する機会を充実させることが望ましい。
- (2) 教養教育担当者と専門教育担当者が連携・協働して医師への素養教育をさらに充実させることが望ましい。
- (3) 教養教育の成果について、専門教育からのフィードバックを積極的に行い、教育内容の充実を図ることが望ましい。

評価事項：教育面における社会貢献活動

1 医療活動への貢献

◇ 特色ある優れた点

- (1) 遠隔医療システムによる医療技術指導を行っている。
- (2) ホームページを利用して積極的に最新の医学・医療情報の発信をしている。

2 地域社会への貢献

◇ 特色ある優れた点

- (1) 地域社会の生涯学習ニーズに応えるため、「旭川医科大学派遣講座」制度を設け、道内市町村の住民の求めに応じて無報酬で講演を提供している。
また、講師リストを作成し、学内教員の所属、職名、氏名及び講演可能な内容のキーワードを公開している。
- (2) 旭川医科大学フォーラムを開催している。
- (3) 附属図書館を地域住民へも開放している。

3 国際交流

◇ 特色ある優れた点

- (1) 外国人研究者・留学生を多数受け入れている。
- (2) 国外大学との交流を図っている。
 - ① 米国マーサー大学
 - ② 中華人民共和国南京中医薬大学
- (3) 教員の国外研修を奨励している。

◇ 改善が期待される点

医学部学生の国外教育プログラムへの参加が少ない。大学としてさらに奨励することが望まれる。医学教育振興財団による医学部学生の英国短期臨床実習派遣制度へ積極的に応募することを勧めてはどうか。

評価事項：教育活動（医学教育・教養教育）**1 教育目標について**

教育目標を具体化し6項にまとめ学内外に周知徹底している。良医の育成に力点を置くのは当然と思われるが、生涯良医であり続けるには、探求心養成としての側面をもつ研究マインドの育成にも留意する必要があるだろう。この点で大学院の細胞・器官系への進学者が比較的多いことは、学部教育における医学研究特論の成果として評価できる。また、遠隔医療の積極的な取組は、学生のモチベーション向上に大きな刺激を与えていると判断される。

2 学生受入れ方針について

教育理念、教育目標及びアドミッション・ポリシーの3点セットを学内外に周知させ、それらが大学説明会に採り入れた模擬授業などを通じて受験生に肌で伝わるよう努力している。選抜方法が多彩であるにとどまらず、AO入試の採用、学士編入の2学年後期からの受入れ等積極性が感じられるし、また、入試種別定員の比率に斬新さがうかがえ、しかも、その決定に当って十分な協議とコンセンサスの形成を経ている様子が理解できた。今後、入学後の成長との関連調査が待たれるが、その際、各入試種類の目的の差に応じた成果が得られているかどうか、調査項目に十分留意する必要があるだろう。

3 教育内容面での取組

新カリキュラムでは、モデル・コア・カリキュラムを尊重した有機的プログラムが統合的に展開されており、選択科目の編成にも見識が表れている。倫理教育について、臨床医学序論においてのみならず、入学直後のチュートリアルで課題を与えて教育を行っていることは効果が期待できる。

4 成績評価と共用試験

臨床実習への関門としての進級要件として、十分な検討のうえで、共用試験の活用(O S C EのみならずC B T)が期待される。学内独自の評価方法は、C B Tの予行的な試験に矮小化せずに検討することが望まれる。

5 学生に対する支援**(1) 附属図書館**

図書閲覧室のスペースは、東京地区諸大学の狭隘さに比較すればもとより、全国平均からみてもうらやましいが、課題探求・問題解決型学習を推し進めるには十分とは言い難い。学生用図書

の充実にはさらに工夫が必要である。館員数の不足は国立大学に共通の悩みだが、北海道大学等との人事交流の成果であろうか、一人ひとりの視野の広さが感じられた。

(2) 解剖実習室

現在問題化しているシックハウス症候群に対処して排気設備の更新に努めたことは、十分に評価される。また、実習に必要な解剖体は、学生4人に1体が十分に確保され、大学（関係教室）と献体団体相互の努力による円満な献体活動が営まれている。

評価事項：研究活動（基礎医学・一般教育）**観点1 研究水準の評価（基礎医学）**

基礎医学と臨床医学の区別のない医学系研究科の4つの専攻別に、研究活動は推進されている。専攻内の多くの研究グループで、特徴ある研究を目指そうとする姿勢がみられることは評価に値する。各専攻における「基礎医学の研究水準」について着目すると、「国際的に評価されている独創性のある研究が数多く展開されており、研究水準は極めて高い」と評価できる。

4専攻のうち細胞・器官系、生体情報調節系、生体防御機構系の3専攻のIFは概ね200以上であり、研究活動は活発で「非常に優秀である」と評価できる。

特に、生体情報調節系の研究水準は高く、旭川医科大学の卓越した研究領域であるが、この領域への基礎医学の関与では、循環呼吸動態学部門のプロスタノイドの生理的・病態生理的役割の解析（薬理学）、虚血心筋の病態とその保護に関する研究（薬理学）、病態情報処理部門の単一遺伝病の解析と臨床応用（公衆衛生学）などが国際的に非常に高く評価されている（IFが高値）。神経科学部門の基礎医学としては、神経系の可塑性（解剖学第一）の評価が高い。

細胞・器官系専攻における基礎医学の研究水準は高い。すなわち、カルモデュリンキナーゼカスケードによる細胞内カルシウムシグナル伝達の制御（生化学第一）、小胞体Ca²⁺ポンプの分子作動機構（生化学第二）、個体レベルの発癌機序（病理学第一）の研究は優秀と評価できる。

生体防御機構系専攻では寄生虫学と微生物学の基礎医学が中心で、IFは必ずしも高くはないが、国際的な評価が高く、コレクチン遺伝子の研究など将来の発展が期待されるユニークな研究が遂行されつつあるのは注目に値する。

観点2 基礎医学と臨床医学の研究連携について

医学系研究科の4専攻におけるそれぞれの研究グループの研究水準は非常に高いが、基礎医学と臨床医学の連携による共同研究の成果は少ないようである。専攻内の研究連携による成果の例として、細胞・器官系専攻の研究領域：細胞生化学における「小胞体Ca²⁺ポンプ遺伝子異常によるダリエー病発症機構」の研究（生化学第二）などがあるが、総じて各研究グループの独立性が高く、基礎医学の研究成果が臨床医学へ十分に活用されていない印象である。

観点3 研究目的と地域特性について

日本最北で、積雪寒冷地の広大な医療圏を担当する医科大学として、その地域特性の医学を研究目的の一つとする意欲は適切である。地域性の高い疾患の研究、広域医療圏を結ぶIT技術によ

る遠隔医療支援などの研究は、特徴的であり、評価できる。しかし、寒冷環境における医学的研究など、地域特性の研究を目指す基礎医学研究は十分とは言えない。

観点4 研究支援施設について

実験実習機器センターは、共同利用施設として適切に運用されており、DNA関連機器は充実されているが、ポストゲノム時代に対応した最新研究備品についての整備が遅れている。動物実験施設で特筆されるのは、マウス初期胚と精子の凍結保存技術を確立、独自の工夫を加えて、学内外の研究者のニーズに応じていることであり、高い評価に値する。

観点5 外部研究資金の導入について

文部科学省科学研究費補助金の取得額は、単科の国公立医科大学と比較すると上位であるが、最近2年は下降傾向にある。文部科学省以外の国内外の科学研究費補助金及び助成金などの獲得額は年間約1億円で、必ずしも多額ではない。これらの外部資金の導入に占める基礎医学の貢献の割合は不明だが、国内外の外部からの大型研究資金の獲得は、今後の研究活動の活性化をもたらすための課題であり、戦略的な対策が必要であろう。

観点6 一般教育の研究活動について

一般教育は、医学系研究科の専攻に所属していないが、哺乳類の配偶子・初期胚の細胞遺伝学的研究（生物学）の評価は高い。一般教育と基礎医学、臨床医学との研究連携はみられないようであるが、一般教育を医学系研究科に組み入れている大学は多く、一般教育の研究活力を大学の研究の活性化に利用すべきであろう。

評価事項：研究活動面における社会貢献活動

研究活動面における国内外との連携・協力と研究成果の社会への還元、提供は活発で、実績、効果が挙がっており、非常に高く評価できる。遠隔医療支援、地域特異的疾患への取組など最北の医科大学の特徴を生かした社会貢献が光っている。しかし、この社会貢献は臨床医学の研究活動によるものが主であり、基礎医学の研究活動の社会貢献は少し弱い。基礎医学は非常に高い研究水準にあるので、その成果の社会還元について、より積極的な姿勢が要請されるだろう。

観点1 研究面から医療活動への貢献について

研究成果の臨床現場への還元として、難治性疾患に対する2つの高度先進医療（腰部伸筋及び各種筋コンパートメント症候群の診断、潰瘍性大腸炎に対する遠心分離法による白血球除去治療）をはじめ、多岐にわたる新しい治療法・診断法及び医療機器の開発が活発に行われ、優れた成果を挙げている。小規模の医科大学から、研究成果の医療への応用が活発に試みられているのは評価に値する。しかし、医療へ応用された研究成果の実用化を目指すための特許出願は、特定の診療科に限られ、あまり多くはない。

観点2 研究面から地域社会への貢献について

我が国唯一の遠隔医療センターが設置され、広大な医療圏との地域連携が遠隔医療システムにより実施されているのは、特徴的な社会連携・貢献として特記できる。対象医療機関の拡大、最新IT技術・装置の開発・整備など課題は多いようであるが、大学の目玉として発展を期待する。また、エキノコックス症、北方野生植物（しらかば等）のアレルギーなど地域特有の疾患や寒冷地の住環境で問題になるシックハウス症候群など地域社会の保健、医療の諸問題に積極的に取り組み、成果を挙げていることに注目したい。

観点3 国際的連携と社会貢献について

国際的な研究連携は活発で、高く評価できる。遠隔医療センターは中国、米国の大学とネットワークを形成、またヒューマンサイエンス財団、文部科学省科研費国際学術研究などによる国際的な共同研究も推進されている。特記すべき国際貢献として、寄生虫学講座が、寄生虫診断の検査法を確立し世界に広く提供、また検査法の世界標準の設定に寄与した業績が挙げられる。

観点4 基礎医学研究の成果の活用について

基礎医学研究成果は国内外の学会、国際学術誌に活発に発表し、広く国内外の社会へ還元・提

供しており高く評価するが、研究成果の実用化の観点から特許についてみると、臨床医学研究成果の特許取得あるいは出願中の件数と比較し、基礎医学研究成果の特許取得件数は少なく、また、特許出願中のものは特定講座に限られている。世界でトップレベルにある研究成果を社会へ還元するために、基礎医学と臨床医学の連携による成果の活用、優れた研究成果を新規の研究開発から実用化し社会還元する体制の整備、及び特許等知的財産の管理運営体制の整備が必要である。

評価事項：研究活動（基礎医学・一般教育）**観点1 医学部医学科・大学院医学系研究科における研究目的、研究目標の設定について**

旭川医科大学は研究目的として、第一に寒冷地という地域の特殊性に立脚した課題と、第二に国立大学として先端的な生命科学、臨床医学に取り組むことをあげている。その目的を達成するための目標としてあげられている事例を整理すると、遠隔医療の確立、予防を視野に入れた健康管理システムの構築、医療休養基地構想の推進など、寒冷地、広域の保健・医療・福祉を意識した総合的な医療システムの確立を目指し、その上で、先端的医療の研究とその基礎となる生命医学の研究の発展を図ると認識した。地方中核都市にあり、北海道の人口分布の状況、産業構造などから、大学としてあるべき姿を打ち出していると評価できる。

観点2 医学系研究科の組織について

旭川医科大学医学系研究科は、平成12年に基礎医学と臨床医学との区分を廃し、研究方法論と生体の諸機能系の観点から基礎医学と臨床医学の講座を融合した4専攻系14部門(領域)に再構成した。この専攻構成は従来の講座中心の構成とはまったく異なった、研究者の研究内容を主眼にして構想されたものであり、ユニークな取組である。

観点3 旭川医科大学全体としての自己判定及び評価について

(1) 本報告書にも記載されているとおり、この評価については各自の個人的な意志に任されており、研究業績については学内の判定基準が明確にされていない。論文リストあるいは各学科の報告を読む限り、水準以上の研究活動を行っていると考えますが、客観性をもった評価は困難である。

(2) 研究内容からの評価だけでなく、地域の国立医科大学として適切かつ特徴ある目標と研究課題を立てているので、大学全体として、それに従った区分での自己点検・評価が必要である。

観点4 医学科における研究評価について**(1) 細胞・器官系****① 細胞生化学部門**

基礎医学の分野として生化学第一講座、生化学第二講座が関与している。研究活動判定票分野別集計及び各講座の論文業績票によると細胞質Ca²⁺濃度を制御する必須の役割を担うCa²⁺ポンプ、その遺伝子変異と病態との関連、カルモデュリン依存性キナーゼとそのフォスファターゼの発見と機能・構造についての研究を行い、成果は全て生化学の代表的国際誌に発表して

いる。研究の独創性，継続性で高い評価を得ている。

② 発生学部門，腫瘍学部門は，臨床講座における研究であるので評価の対象外とした。

(2) 生体情報調節系

評価は 3 部門(神経科学，循環呼吸動態学，代謝内分泌学)における主要な研究目標について行った。この分野に係る基礎医学系講座は神経科学(解剖学第一，生理学第二，衛生学，法医学)，循環呼吸動態学(生理学第二，薬理学)，代謝内分泌学(解剖学第二，生理学第一，薬理学)である。

全体的な研究水準，研究内容，独創性及び発展性については IF を基準として評価しているが，いずれも高い研究内容と評価できる。基礎医学分野が貢献している分野では各種プロスタノイド受容体，レニン・アンジオテンシン，神経系の可塑性・中枢神経障害時の反応，運動・感覚機能の再建・脱神経節の神経再支配，その他大脳基底核による随意運動制御機構の解析，下垂体前葉・松果体を中心とした内分泌細胞の微細構造・ペプチドホルモン分泌過程の分子生物学的解析に着実な成果があると評価される。

(3) 生体防御機構系

基礎系講座としては病理学第二，微生物学，寄生虫学が属している。研究内容として本研究領域ではヘルペスウイルスの分子生物学と抗ウイルス薬及びウイルスベクターに関する研究，多包虫症・有鉤囊虫症の分子生物学的解析，異物に対する生体免疫システムの解明，コレクチン遺伝子の機能解析が挙げられる。寄生虫学講座及び微生物学講座とも基礎医学から臨床医学へ結びつける研究が進んでおり，医療へフィードバックが行われている。「多包虫症・有鉤囊虫症に関する研究」「異物に対する生体防御システムの解明」「コレクチン遺伝子の機能解析」の研究では北海道地域のみならず，国際的にも貢献をしていると評価される。

(4) 人間生態系

社会医学系 3 講座の中で取り上げているのは，「神経毒の作用メカニズムの解明」「神経変性疾患パーキンソン病の発症機序」「砒素中毒の病態解明」「環境汚染物質に対する免疫応答を含む生体影響の解明」「環境汚染物質の生体への影響・シックハウス症候群に関する研究」などであり，着実な成果を挙げていると評価できる。また，その成果が直ちに(地域)社会に還元，貢献できる分野を含んでいることから評価できる。

<総括意見>

① 提出された資料は，専攻系及び部門(分野)ごとに教員の個人的評価を集計する方法で，研究テーマに従った目的・目標を提示してその成果について評価を行っている。個々の評価については各自の個人的な評価に任されており，研究業績については学内の統一した判定基準が

明確にされていない。学内で統一した基準の設定が必要である。

② 今回の自己点検・評価で研究目的と研究業績を分析した部門（領域）は、14 部門のうち 8 部門である。各部門の中で組織化された基礎医学の講座が中心になり、「先端的な研究の推進」という目的に向かって活動していることは理解できるし、また、個々の研究者についても優れていると評価できる。しかし、今回、個人の総和として部門の業績を資料として評価している。各々の研究目標に掲げたテーマに従い、個人個人の研究成果について業績を添え、吟味・整理して提示すべきである。講座ごとの論文リスト一覧（研究活動判定票分野別集計とそれに添付された論文リスト）だけでは第三者は評価できない。また、他の部門について評価からはずした理由を明記すべきである。

③ 各部門の評価については、当大学の場合、多分、研究テーマごとの構成になるかもしれないが、関わった講座あるいは分野名、それを構成する教員名と人数、大学院生数等を含む研究組織を明確にする必要がある。その上で、研究内容とその成果（論文発表、学会発表、受賞等）、獲得した外部研究資金（文部科学省科学研究費補助金、その他省庁の研究費、奨学寄附金等）、特徴ある業績などをわかるように資料を作成する必要がある。

④ 1つの講座が複数の部門に関与しているところがあることから、評価対象になっている組織の中で基礎系の講座の位置づけが不明瞭である。当大学の研究科の構成理念は評価できるが、基礎系教員がどのように関与しているか、臨床系教員との共同研究が研究目標に盛り込まれているのか、臨床系大学院生に対して基礎系教員がどの程度指導に当たっているのか明らかにする必要がある。このユニークな専攻系・部門（分野）の体系が正しく評価されるためにも、上記の点に配慮する必要がある。

観点5 一般教育における研究評価について

一般教育は歴史、心理学、社会学、数学、数理情報学、物理学、化学、生物学、生命科学、英語、ドイツ語の 11 学科目からなる学科目制をとっており、それぞれの学科に特化した領域の研究を推進し、医学に関わる自然科学、人文・社会学の発展に貢献することを目的としている。その中で論文リストが出ている心理学、物理学、生物学は評価できる。また、文部科学省科学研究費補助金の獲得に努力しており、教養教育の中で研究活動を続けていることは評価できる。

評価事項：研究活動面における社会貢献活動

観点 研究面における社会(社会・経済・文化)的貢献について

「研究活動面における社会との連携及び協力」の資料から見る限り、地域に密着した活動が積極的に行われていることは理解でき、評価できる。

研究による社会貢献の中で附属病院に遠隔医療センターを設置して、地方医療機関との連携、国際的な視野で米国の研究機関とネットワークを使った研究の交流など活発な活動は高く評価できる。現在のところ、眼科、病理、放射線診断の利用が突出しており、他分野を含めて全学的な取組と利用がさらに望まれる。

評価事項：研究活動面における社会貢献活動

○研究活動（臨床医学）

一研究活動面における社会貢献活動

*旭川医科大学から提出された点検評価報告書を参考として

I 研究活動面における社会貢献のとらえ方

1 研究成果の社会貢献に関して

2 研究への取組や活動の現状

II 研究活動面における社会貢献の目的及び目標

1 目的

2 目標

III 研究活動面における社会貢献の評価結果

1 目的及び目標達成の状況

2 取組の実績と効果

3 改善のための取組

IV 評価結果の概要

1 社会貢献への取組に対する評価

2 社会貢献の実績に対する評価

3 改善のための取組に対する評価

I 研究活動面における社会貢献のとらえ方

1 研究成果の社会貢献に関して

旭川医科大学の研究活動面における社会への貢献についての基本理念は、①広大な北海道、特に道北・道東地域の医療レベルを向上させるために医学研究者を育成し、それに伴い各専門領域の研究を発展させる、②それらの成果を地域医療において実践する研究テーマの選択及びチームの構築を図る、③生命科学の基礎から疾患の診断・治療に関する臨床課題まで幅広い領域において研究を推進する、ととらえることができる。

2 研究への取組や活動の現状

研究目的を達成するために、生命科学の基礎的・臨床的研究を推進し、その応用を通じて広く社会へ貢献せんとする本学の理念を達成すべく全学的目標を設定し取り組んでいる。

- (1)生命科学に関する先端的な基礎的・臨床的研究を推進するとともに、倫理観を備えた高度な研究能力をもつ研究者の育成を図る。
- (2)広大な地域を担当する大学として、遠隔医療システム、基幹病院との連携及び患者の搬送システムを最新の IT 技術などを駆使して構築し、質の高い医療をすべての地域住民が利用できるようにする。
- (3)広大な地域の包括的な健康管理システムの構築を図る。そのために、予防を中心とした保健・医療・福祉に関するネットワークの構築や安全な食品の生産に関する研究を推進する。
- (4)地域性の高い疾患の基礎的・臨床的研究を推進し、研究成果を世界に発信するとともに地域に還元する。

先述の全学的目標を達成するために領域ごとに取り組んでいる活動は、以下に掲げる研究現状として整理することができる。その特徴は講座制にとらわれることなく、基礎医学、臨床医学の区分を廃し、大学院医学系研究科の専攻研究領域ごとに研究課題を設定し、日常的に研究を推進していることにある。

(1)細胞・器官系

- ① 細胞Ca²⁺代謝とCa²⁺による細胞機能 制御の分子機構の解明
- ② 細胞の分化と老化の機構解明
- ③ 生殖受精，発生分化及び形態形成の機構解明
- ④ 肺，消化器，肝胆道系，頭頸部，子宮・卵巣，血液など各種組織における悪性腫瘍の生物学的特性，分子生物学
- ⑤ 発がんにおけるウイルスの関与など幅広い分野でがん発症機構の解明と治療戦略

(2)生体情報調節系

- ① 神経の変性・修復の分子機構の解明
- ② 随意運動・喉頭運動制御機構の解明
- ③ 内因性鎮痛系の役割
- ④ てんかん発生機構及び治療法の確定
- ⑤ プロスタノイドの生理的・病態生理的役割の解析
- ⑥ 臓器循環調節機構と病態，心血管リモデリングの分子機構の解明と治療法の開発
- ⑦ 低酸素に対する生体応答機構の解明と低酸素性肺疾患の治療法の開発
- ⑧ 不整脈の成因の統合的研究と治療法の臨床応用

- ⑨ 血管移植・人工血管の開発とその臨床応用
- ⑩ ペプチドホルモンの産生・分泌・シグナル伝達の分子生物学的解析
- ⑪ 糖尿病の疫学・神経内分泌・細小血管障害の成因と治療法の解明
- ⑫ 温熱生理とその病態に関わる機序の統合的研究
- ⑬ 肝・胆・膵機能及び病態に関わる統合的研究

(3) 生体防御機構系

- ① 先天性免疫機構の解析
- ② 生体寄生体の分子生物学的、疫学的解析とその応用
- ③ 地域特異性のある免疫疾患の治療法の開発
- ④ 自己免疫性疾患の治療法の開発
- ⑤ 難治性感染症の治療法の開発

(4) 人間生態系

- ① 環境汚染物質に対する免疫応答を含む生体影響と中毒の病態解明
- ② 単一遺伝病及び生活習慣病などの多因子遺伝病の病態解明とその臨床応用，予防への応用
- ③ DNA 多型と個人識別
- ④ 神経毒の作用メカニズムの解明と神経変性疾患の病態解明

II 研究活動面における社会貢献の目的及び目標

1 目的

本学の社会貢献の目的は北海道，特に道北・道東地域における医学・医療の拠点として高度先進医療や医学研究を発展させることにある。具体的施策として，

(1) 地域医療機関・自治体との連携・協力体制を強化する。そのために遠隔医療センターを中心に広範なネットワークを築き，遠隔医療システムを確立し，日常的に実践する。

(2) 民間企業との研究連携・協力

医薬関連企業との共同研究の実施，外部資金の受け入れを推進する。

2 目標

目的を達成するため，以下の課題が設定されている。

(1) ネットワークを利用した遠隔医療システムを開発・整備し日常的に活用する。

(2) 学内組織の整備を行い民間企業や地域社会との連携を強化する。

(3) 地域医療機関，地方自治体との研究・診療連携を強化し，生活習慣病，老人保健，小児保健，

周産期医療など多様な医療・保健問題の改善を図る。

- (4)全国的・国際的規模の研究連携の強化策として厚生労働省など政府機関，各種事業団との協力を進める。

Ⅲ 研究活動面における社会貢献の評価結果

1 目的及び目標達成の状況

(1) 地域医療の担い手としての社会貢献の評価

広大でしかも離島などを含む遠隔地が多く，困難で特殊な道北・道東の医療を担うという社会的役割を果しているという点で優れている。遠隔医療の実践では，遠隔医療センターを積極的に活用し，全学的な取組として多くの臨床領域で遠隔診断，治療支援，手術支援の実施や医療情報の交換など，IT を利用した画像伝送による医療技術の地方医療機関への提供を実施しており，特徴的である。また，北海道に特有の地域医療・保健の充実・改善に資するべくエキノコックスの診断と発症予防，ライム病の予防・治療，白樺花粉症対策，高気密建築構造に起因するシックハウス症候群，凍死などの地域特有の問題についての研究成果を地域社会に提供し，連携協力する取組を実施している点も高く評価される。

これらの取組は本地域だけでなく，国際協力により同様の問題を抱える中華人民共和国やロシアなど諸外国の医療・保健の充実・改善に貢献している。

(2) 民間企業や地域社会との連携の評価

多様な研究の成果を医療機関・地方公共団体・関連企業などに還元・提供し，研究成果の活用を図っている点が注目される。特に講演会の実施や医療現場における医療技術の指導と提供，企業への研究成果の提供と新規開発の医療技術・医薬品の活用，地方公共団体への医療・保健情報の提供と指導など，地域性に根ざした取組が全学的に実践されている点が優れている。また，各種の医療相談，医療情報のデータベース化やソフトウェアの開発など多岐にわたる内容が既に実施されており，これらの取組は目的・目標を達成する上で適切な内容であり，十分に貢献している。

(3) 地域医療機関・自治体との連携の評価

北海道に主にみられキタキツネが感染源であるエキノコックス症，また，シラカバを中心とする北方野生植物のアレルギーに関する研究など，地域社会に密着した研究姿勢や取組が行われている点が評価される。さらに，シックハウス症候群に関する研究では，北海道発信の新規医療に結びつく取組として注目を集めている。遠隔医療センターでは，北海道内 26 医療施設，道外 2 医療施設とネットワークを形成し，眼科，周産期医療，癌診断など幅広い疾患を対象に活動して

いる点が特に優れている。

(4) 全国的・国際的研究連携の評価

寄生虫診断領域で画期的な検査法を確立するとともに世界に広く提供し、さらに検査法の世界基準の標準化においても重要な役割を果たしている点が評価される。また、諸外国から多くの留学生を受け入れ、教育及び共同研究を通じて多くの人材を育てるなど、国際性、社会性に優れた取組を行っている。遠隔医療センターでは、中華人民共和国の南京中医薬大学、米国のハーバード大学スター国際遠隔医療センターともネットワークを形成し連携を図っている点が特筆される。

◇ 社会貢献の水準

前述した4つの目標は十分に達成されており、社会貢献度は大きい。中でも地域医療センターの積極的活用により地域医療の実践、研究への応用が特に優れている。

2 取組の実績と効果

遠隔医療センターを活用した道北・道東を中心とした地域のセンター病院や基幹病院、さらにはそれらの中核病院が支援する地域医療機関への画像伝送システムなどを用いた臨床診断、病理診断、病態の把握、至適治療法、特に緊急性を要する治療の適応・選択、外科手術手技などへの助言・指導・討論の件数の増加、内容の充実・高度化が推進され、大きな効果を挙げている。

また、基礎研究の特筆すべき成果としては、①プロスタノイドのノックアウト、トランスジェニック動物を用いた循環器系における役割、②カルモデュリン依存症プロテインキナーゼⅡ特異的阻害剤開発に関する特許取得、③新規コレクチン遺伝子の特許内容の進化、④プロテイン1遺伝子の多型及び関連疾患の診断法に関する特許申請、⑤次世代ポストゲノム研究者とバイオ企業相互のネットワークの立ち上げ・中核的研究開発拠点の形成、⑥潰瘍性大腸炎の新しい治療法の開発などが挙げられる。また、高臨場感眼科医療画像伝送技術の研究開発は次世代の3次元動画の圧縮・伝送方法の確立に大きく貢献した。さらに、エキノコックス症など寄生虫風土病の診断精度の向上、治療に大きく貢献した。臨床研究の成果では、大学と地域関連病院との連携による臨床治験受託研究、自主研究で得られた成果を地域の医療従事者に還元している。

エキノコックス症の診断精度の向上、治療への貢献は北海道内にとどまらず、全国レベル及び中華人民共和国・ロシアなどの近隣諸国、さらにはアジア・アフリカ諸国に及んでおり国際性も十分である。

◇ 社会貢献の水準

課題に対する取組は十分な実績を残して優れており、社会貢献の効果が示されている。

3 改善のための取組

遠隔医療に関する問題点としては、領域が限定されていることが挙げられるが、これは機器の

能力の限界、安くはない通信費、スタッフの不足などが主たる原因となっているが、現在関係機関の協力を得て改善が図られつつある。

また、取得あるいは申請した特許内容を含めた先端的研究の成果を基に産業界とこれまで以上に協調・協力し、創薬や先端的な治療機器を開発すべく改善が図られている。

地域住民の健康管理面にも多様な取組が実施されているが、広大な地域を全てカバーすることは困難である。しかし自治体の積極的な協力で効果が実証されており、その連携は益々強化されている。

一方、全国的・国際的研究成果の社会貢献については、限られた領域で実践されているに過ぎず各領域担当者のさらなる努力が期待される。

IV 評価結果の概要

1 社会貢献への取組に対する評価

旭川医科大学においては「地域の医療レベルを向上させるために医学研究者を育成し、それに伴い各専門領域の研究を発展させる」ことを第一の目標に地域医療センターの構築、民間企業との連携、地域医療機関との連携強化など特徴的な取組を行っている。その成果は地域医療の充実に如何なく発揮され、地域住民の健康保全に大きく貢献し、当初の目的・目標を達成していることから優れており、高く評価される。

2 社会貢献の実績に対する評価

連携（協力）活動の実績、研究成果の活用の実績・成果につき総合的に判断すると、取組の効果は十分に挙がっており、その貢献度は高い。特に優れた点として、遠隔医療センターを活用した遠隔医療の実践が特筆される。また地域特異的問題の改善・解決に向けた活動としてエキノコックス症、ライム病、白樺花粉症の診断・治療・啓蒙活動やシックハウス症候群、凍死などにつき国内・国外に研究成果を提供し、優れた効果を挙げている。

3 改善のための取組に対する評価

各目標をさらに高度に実践するための取組が行われており、評価できる。可能であれば上述の如き優れた研究が他の領域でも幅広く実施され、国内はもとより国際的にも貢献し得る課題をさらに増やす努力が望ましい。また、それらの成果につき、評価を受ける手段として英文論文数の執筆数を増やすことも必要である。

評価事項：研究活動（臨床医学）**観点1 研究の量と質について**

医学科における研究は分野別に整理されており、基礎と臨床の共同研究が積極的に行われているため、臨床研究を独立させて評価することは難しいように思われるので、分野ごとの評価としたい。

まず、全体の印象としては、量、質とも一定レベル以上であると判断した。その根拠は、細胞・器官系の分野での Loricrin heratoderma という角化異常症の研究、カルモデュリン依存性キナーゼやフォスファターゼの発見、リムホメオボックス遺伝子群の発生における役割の研究、腫瘍学分野一般の研究、生体情報調節系の分野での Alzheimer の病因の研究、喉頭高次機能の制御機構に関する研究、プロスタノイドの生理的・病態生理的役割の研究、心血管リモデリングの研究など、さらに生体防御機構系におけるスカベンジャー受容体としてのコレクチン遺伝子の機能解析、人間生態系における Engelmann 病の原因遺伝子の解明、Rubinstein Taybi 症候群の遺伝子変異の解析など、数多くの研究結果が一流の国際誌に発表され、高い評価を得ている（年報第7号の研究自己評価に基づく）ことによる。

また、いわゆる impact factor (IF) などには表れないが、多乞虫症、有鉤虫症に関する研究や、環境汚染物質に関係する研究、IT 技術を用いた遠隔医療研究など、地域に密着した重要な研究が根付きつつあるのも評価できる。しかし、個々の論文を詳細に見てみると、いわゆる IF の高いものはしばしば、臨床の教室でオリジナリティを持って作り上げたものというよりは、留学先での論文であったり、基礎教室の仕事を手伝う形で共著者になっているものが見受けられる。今後は、臨床の教室独自の優れた仕事がなされていくことを期待したい。

また、全体的にみて、ここ1、2年は、若干アクティビティが低下しつつあるのも気になる（科学研究費補助金の獲得額が低下しつつある）。この点は一層の奮起を期待したい。

観点2 旭川医大としての特徴ある研究について

大学改革のうねりの中で、北海道での国立医科大学として、生き残りをかけて行くためには、それなりの特徴ある研究が求められるはずである。この点については、寒冷環境の生体に及ぼす影響の研究、本道における特異な感染症の研究、IT 技術を用いた遠隔医療の構築など、いくつかのテーマが進められているように思われるが、今後もこういった「国立旭川医科大学」を十分に意識した研究の推進が望まれる。

観点3 臨床研究としての評価について

最近、国内外を問わず、医学における研究の意義が問い直されつつある。つまり、現在の医学研究があまりに基礎研究（生物学、分子生物学など）に偏り過ぎているために、本来の「病気を治す」研究にもう少し力を入れるべきであるとする考え方が提唱されている。

中でも、いわゆるトランスレーショナルリサーチ（分子生物学、分子遺伝学的な知識を臨床の場に活かす研究）は、世界的にみても医学研究の重要な課題となりつつある。

旭川医科大学の臨床研究は上述したように質量ともに優れているが、このような観点に立ったものが少ないのが残念である。臨床研究では、Nature や Science よりも New Engl J Med, JAMA, Lancet, J Clin Oncol, Nature Med などといった臨床の一流雑誌を目指すことが望ましいのである。また、これほどの一流誌ではなくても新しい治療薬（治療法）や診断法の開発などの研究をより積極的に行い、発表していくことが期待される。

観点4 科学研究費補助金などについて

科学研究費補助金の総獲得額は潤沢で、NEDO などの大型研究費の獲得に成功している点は大いに評価できる。ただし、科学研究費補助金についていえば、ここ1～2年低下傾向にあるのが気になる。また、ある程度はやむを得ないと思われるが、研究費を獲得する講座とそうでない講座に大きな開きがあるのも気になる点である。

観点5 大学院生、外国人留学生について

大学院生の入学率も高く、また外国人留学生も積極的に迎え入れている点は評価できる。ことに、大学院生の3分の2近くが社会人入学である点は極めて特徴的で、高く評価される。残念なのは、大学院生のきちんとした授業カリキュラムが立てられていない点である。今後の改善が望まれる。

観点6 民間企業との共同研究、ベンチャーカンパニー及び特許について

特許や民間企業との共同研究、ベンチャーカンパニーの設立などは独立行政法人化へ移行することを考慮すると、是非とも積極的に取り組むべき課題であるが、一部の講座を除いてそのような動きが少ないことが気になる。

観点7 施設について

動物実験施設、実験実習機器センター、放射性同位元素研究施設等は、すべて最新の機器と設備が充足されており、研究を支援する体制は整っていると評価した。また、情報処理センターも小規模ながら機能している。

附属図書館はCD-ROM 検索サービスをはじめ地域市民コーナーを設けるなど、ユニークな試みも評価される。ただし、最近の研究者のニーズは、オンラインジャーナルの導入であることから、早急に対応されることが望まれる。

評価事項：研究活動面における社会貢献活動

観点1 地方公共団体，地域医療関連機関，保健所，北海道警察などとの連携について

生活習慣病の啓蒙や遺伝子カウンセリングを含む小児保健指導などによる貢献は勿論のこと，地域特有の感染症（エキノコックス有鉤嚢虫）の調査，さらに環境問題への積極的なアプローチ及び法医学教室の死因究明を介しての地域警察との連携などは，極めて高く評価することができる。

観点2 医療従事者への貢献について

この点についても，生涯教育としての大学の門戸開放，登録医制度の導入，学内者及び学外者を対象とした旭川医科大学フォーラム，講演会，医療懇話会を通じての啓蒙活動などが積極的に行われている事実は評価できる。とりわけ遠隔医療システムの活用は特記すべきもので，地域医療機関で働く者，ひいては地域医療そのものにとって，極めて大きな貢献となっている。

観点3 地域住民への貢献について

スクールカウンセリング，各種健康相談，専門相談，健康講座，炎症性腸疾患患者との交流会等を通して，住民の健康管理に積極的に携わっている。ただし，貢献している講座は限られており，より広く全学的な取り組みが望まれる。

観点4 民間企業，ベンチャー会社及び特許について

既に述べたように，この辺りの貢献はまだ一部に限られているように思われる。独立行政法人化に向けて，今後の重要な課題である。

観点5 研究の全国的，国際的な展開について

遠隔医療システムを用いた眼科学講座の国内・国外での活動は極めてユニークで，高く評価できる。また，感染症を中心にした国際的な研究協力がなされている点も高く評価したい。さらに，小児内分泌のマスクリーニングなど全国的な共同研究がなされており，今後さらなる発展が期待される。

まとめ

以上をまとめると、臨床医学での研究は全般的にみて活発に行われているということが出来る。ことに基礎医学講座との共同研究にその成果が良く現れているように思われる。また、感染症や環境問題、遠隔医療システムを用いた研究などユニークな研究も行われている。今後はトランスレーショナルリサーチや治療法、診断法の開発など臨床の研究をより積極的に進めることが望まれる。

評価事項：教育研究活動及び社会貢献活動（看護学）**I 教育活動****1 医学部看護学科****観点1 教育目標ならびに教育内容について**

平成8年4月から開始された看護学科の教育は6年目を迎える。教育目標は大学の理念を受けて、

- ① 「生命の尊厳」を第一義とした人間性の涵養と看護学の理論と実践を極める基礎的能力の育成
- ② 看護学における諸問題の論理的・科学的解決能力の育成
- ③ 社会情勢や医療の動向を察知する姿勢，変化への適応力の育成
- ④ 国際的な視野に立つ創造力の育成

等が明示されている。また，第1学年から第4学年の目標レベルが段階を追って具体的に示されていること，ならびに卒業時の到達目標が明示されていることは評価に値する。ただ，それらの目標と具体的な教育内容がどのように関連づけられているのかが明確になっていない。6年間にカリキュラム改定を2度行っていることを考えると，方向性の揺らぎを最小限にし，改定するカリキュラムを浸透させるという点で，教育内容が教育目標との関連において明確に位置付けられていることが必要であり，また，教員個々がそれらを認識している必要がある。

観点2 学生受入方針について

アドミッション・ポリシーを明示し，周知徹底を図っている点が評価できる。また，一般選抜，AO入試，推薦入学，第3年次編入学，帰国子女特別選抜，私費外国人留学生選抜と多様な選抜方法を採用している点は評価でき，その努力に敬意を表する。ただ，多様な選抜方法実施に伴う教職員の負担の増大が予測されるため，今後は，入学後の学生の学習状況やアドミッション・ポリシーの観点から各選抜方法を評価し，見直し等の検討につなげていただきたい。

観点3 教育方法及び成績について

看護学の教育課程において，臨地実習は看護実践能力を総合的に培う上でとても重要である。本学科においては，「臨地看護学実習ガイドライン」に各実習の目的・目標や実習内容，ならびに学生の自己評価基準が1冊にまとめられており，学習手引きとしてとてもわかりやすい。特に，看護学生の倫理行動基準や実習中の事故防止に関して記述されていること，また，臨地看護学実

習企画に対する学生評価表を提示し、学生評価を積極的に取り入れながら実習企画を改善しているという姿勢はとても優れている。

臨地実習においては、臨地現場の看護職者の教育への参加度も教育効果に大きく影響するが、主たる実習施設である附属の大学病院看護部と毎年共催で看護学ワークショップを開催し、参加率も高いことは、FDのみならず学習環境の向上という点で大変評価できる。

医学教育実践指導センター（スキルズ・ラボラトリー）は、医学教育のみならず看護学教育においても積極的活用が望まれるところである。本センターの設備を最大限生かした教育方法の開発を医学科教員と共に取り組むことを期待する。

2 大学院医学系研究科看護学専攻

観点1 大学院教育について

高度な看護実践家、看護教育者、看護学研究者ならびに国際社会に貢献できる人材の育成を目的として、平成12年に看護学専攻修士課程が設置された。現在設置後第1回の修了生を輩出したばかりであり、評価するには時期尚早かもしれないが、定員充足率や学位授与者数など、今後の課題となる点が多い。定員16名の充足が困難であることから専門領域を当初の3から10に拡大したとのことであるが、教育内容や論文指導体制がどのように整備されたのかわかりにくい。主たる論文指導者となりうる基準等の作成も必要なのではないかと考える。また、指導教員同士の連携とともに、学生の評価や他者評価を取り入れるなど、大学院教育を充実させる体制の強化が必要である。

観点2 学生の研究活動への支援について

大学院生にとって学習環境の整備は重要であり、特に洋雑誌や文献検索等の充実が望まれる。研究活動を支援する具体的方策について、段階的に整備していく等、組織的・計画的な取組が求められる。

II 研究活動

教育と研究ならびに社会貢献のバランスは各教員個々の課題ではあるが、個人の努力に任されているところがあり、今後は教員評価等、組織的な評価体制の確立が望まれる。研究活動の評価に当たっては、看護学固有の評価の視点が明示されることが望まれる。

III 教育研究活動面における社会貢献活動

病診連携や遠隔医療に関して大学に実績があるため、今後は看護学科においてもそれらのネットワークを活用した、教育・研究面での活動が期待される。本学卒業生や大学院修了生に対し、

キャリアアップの手段を提供できる機関として機能していくことも望まれる。

以上、開設6年目の新しい学科として今後充実すべき課題も多いが、精力的な取組が評価できる点多々ある。今後はそれらの実績を評価しつつ体制として整備し、歴史のある医学科や大学附属病院とともに着実に発展していかれることを期待する。

評価事項：教育研究活動（看護学）**I 教育活動****1 医学部看護学科****観点1 教育目標について**

点検評価報告書には看護学科の教育目標は今日の標準的なものが記述されている。しかし、概要などには医学部のものが記述され、看護学科を含めてのものと理解しがちである。医学部の目標は地域医療が重視され非常によい視点と考えるが、看護学科にはその連動性はなく、カリキュラムにもみられない。

観点2 学生選抜について

多様な選抜方法がなされていることは評価できる。さらに国立ということで、質のよい学生を受け入れることが可能になっているといえよう。しかし、多くの労力が費やされているので、それらの効果について追跡調査があってもいいように思う。

観点3 カリキュラムについて

点検評価報告書には、「カリキュラムの主要概念を人間、健康、環境と社会、看護とした」と記述されている。しかし、その後の記述にはこれらを枠組みとしてカリキュラム構成をした記述は全く認められない。楔型カリキュラムとか、4年間一貫教育、4年間にわたる対人関係論の展開などが記述されているが、多様なアイデアが交錯していることはわかるが、縦糸と横糸を明確にしたカリキュラムデザインをして、組織化して説明されると明瞭になるだろう。

カリキュラム全体を見廻して、特徴的なものは対人関係論の展開であり、評価できる。その他は標準的である。

観点4 看護学科履修要項について

教育内容を記述している履修要項が準備されていたが、開講科目の一部しか収録されていなかった。学生が科目の登録をする上で入り用なので、準備するなら全科目のものが収録されるのが望ましい。

観点5 看護学科 臨地実習ガイドラインについて

どこの大学も最初からガイドラインや実習要項を作って実習を行っているが、平成14年度に作られた実習要綱は実習レベル目標が明確であり、よく考えられた実習要項である。

観点6 卒業研究について

ヒヤリング時に要求して抄録集を提出していただいた。内容をみると熱心に取り組まれていることがわかり、評価できる。

観点7 達成状況 国家試験合格率

国家試験合格率は看護師については問題ないようであるが、平成14年度保健師については76.5%と低率であるので改善されたい。また、助産師コースが開講されているのに、助産師受験者が少ない現状も見受けられるのでこの面でも改善されたい。

観点8 FDについて

FDとして、実習指導について病院看護部との合同ワークショップが行われている。大学開設初期はこの種の課題を病院看護職員に実施する必要がある、今後の連携上も有意義であろう。なお、大学職員対象とするその他の課題についても今後考えていく必要がある。

2 大学院医学系研究科看護学専攻

観点1 3大講座を1講座にしたことについて

助手定員の削減により、教員組織を効果的・弾力的なものにするために一つにしたということであったが、研究科で専門を深く追求していくところで効果的であろうかと疑問が残っている。また、看護学科として多くの助手を抱えている実状から彼らの教育・研究指導体制は明確であろうか疑問であり、留意して指導されたい。

観点2 大学院生への各領域における指導体制について

平成15年度から専門領域を3から10領域に拡大したと報告を受けた。各領域の指導教員決定について基準を質問したところ、基準はないとの回答であった。完成年次以後は各大学で一定の基準をつくり、基準に基づき新領域の開設または人事の交代をすることが望ましい。

観点3 学生の充足状況について

定員16名であるが、平成12・13年度はそれぞれ81.3%しか入学していない。定員確保に努力されたい。

観点4 修士論文について

ヒヤリングで論文のテーマだけは要求して聞くことができたが、修士論文はみることはできなかった。課程教育の重要な資料であるので、外部評価には資料としてみせていただきたい。

観点5 課程修了者が少ないことについて

平成13年度修士課程修了者はわずか2名であった。社会人学生が多いことを理由にされているが、指導体制や指導方法についても改善されたい。

II 研究活動

観点 看護研究について

点検評価報告書には研究論文数が講座ごとにでているが、看護系で重要なのは原著論文であるので、発表と論文を区別して整理し記述されたい。また、看護学科の研究論文数には医学系の論文も入っているので、純粋に看護者による看護研究の統計をまとめていただきたい。

総じて、新しい学科なので、教育が先行しているせいか、看護学科の研究についてはわずかしか記述されていない。研究活動はこれからの課題といえよう。

評価事項：教育研究活動面(看護学)における社会的貢献活動

1 地域社会への貢献

観点1 地域の要請に応じて始まりかけている

医学科は地域医療や研究に積極的に貢献されていることは資料からも設備面からも十分に把握できる。看護学科は地域の要請に応じてぼつぼつ活動が始まりかけている段階であると評価する。公開講座は、まだ看護学科としてはしていないとのことであったが、地域医療を標榜する大学として、今後積極的に医学科との共同または独自での活動を期待したい。

観点2 医学部にある資源を地域活動に看護学科も活用を

医学科は立派な設備と人材があり、遠隔医療を積極的に進められて効果を挙げておられる。看護学科も近くにある資源をもっと有効に活用して、教育・研究に効果を挙げられたい。

2 国際的交流と貢献

国際的交流と貢献については、これまでは記述するほどのものはない。これからの課題であろう。

旭川医科大学外部評価報告書

平成15年6月 発行

編 集 旭川医科大学点検評価委員会

発 行 旭川医科大学
〒078-8510 旭川市緑が丘東2条1丁目1番1号
